

コウノトリ湿地ネットニュースレター



3号 2009年5月1日発行
コウノトリ湿地ネット
豊岡市城崎町今津1362
電話 0796-20-8560



城崎小学校6年生による看板除幕式

ハチゴロウの戸島湿地がオープン！

昨年から工事が行われていた「豊岡市立ハチゴロウの戸島湿地」の基本部分が完成し、4月2日から一般公開されています。この日、開催されたオープンセレモニーでは、谷口兵庫県但馬県民局長や中貝豊岡市長らのあいさつの後、この湿地の指定管理者である横田当会代表が管理運営への決意を表明しました。

造成された湿地は、まだ土ばかりが目立っていますが、今後人と自然の力でどんな風に変貌し、生きもののワンダーランドになっていくのか、楽しみです。

コウノトリ湿地ネット副代表 佐竹節夫



完成した戸島湿地全景



挨拶する中貝宗治豊岡市長と、横田登代子コウノトリ湿地ネット代表

目次

生態系の見本市「戸島湿地」の再創造	1
兵庫県立大学自然・環境科学研究所 三橋弘宗	
ハチゴロウの戸島湿地 ここが見どころ、売りどころ！！	4
コウノトリ湿地ネット副代表 佐竹節夫	
コウノトリレポート(2009年コウノトリの繁殖)	9
コウノトリ湿地ネット 小谷繁子	
投稿のページ	11
・子供たちは未来をになう！	豊岡市立城崎小学校 谷垣 茂彦
・皆様 山、川を見つめようではありませんか。	楽々浦地区 瀬崎権太夫
湿地ネット会員のページ	13
・ハチゴロウありがとう	コウノトリ湿地ネット 宮垣芳和
・ハチゴロウの戸島湿地『夢』	コウノトリ湿地ネット 田岡 茂



KODOMOラムサールin韓国で取組みを発表



韓国・ナクトンガン河口にて韓国の子どもたちと

生態系の見本市「戸島湿地」の再創造

兵庫県立大学自然・環境科学研究所 三橋弘宗

(元戸島湿地基本構想・計画策定委員長)

戸島湿地の魅力

カゴのなかをのぞくと、クロベンケイガニとサワガニ、さらにボラとドジョウにモリアオガエルが、よく見ると溪流にすむカワゲラやヘビトンボもいれば、メダカやヤドカリも。周りでは、コウノトリとナベヅルがミズアオイにとり囲まれ、カワセミがボラを捕らえる光景、ヘビを捕まえてきたコウノトリがヒナに餌をやっている様子。戸島湿地の生態系が順調に推移してゆけば、こんな風に、ひとつの場所だけで色んな生息場所にすむ生きものを観察ができるに違いない。こんなところは、国内を探しても、そうそうないでしょう。海の生きもの、溪流の生きもの、森の生きもの、湿地の生きもの、田んぼの生きもの、川の生きもの、そして多くの絶滅危惧種に特別天然記念物。戸島湿地の特徴は、一言で言えば、「生態系の見本市」。

楽々湾を通じて円山川、日本海と何の障害物もなく繋がり、そのすぐ先には国内でも珍しい汽水域と淡水域の湿地帯が広がっています。森・川・里・海が、ほんの3kmほどの範囲でコンパクトにつながり、多様な生態系が隣り合う場所は、全国的にも類をみないものです。戸島湿地は、まるで博物館のようにコンパクトにいくつもの生態系が並び、それぞれが季節ごと、年を経過することに様相を変えてゆく「生態系の見本市」であると同時に、湿地再生のための「野外実験場」となっています。

さて、この戸島湿地ですが、「生態系の見本市」をコンセプトで進めてきましたが、すんなりと今の形になった訳ではありません。私は、この計画の検討において、幸いにも最初の段階から関わらせて頂き、様々な面で自然再生の難しさを実感させて頂きました。湿地再生といえども、水生昆虫や魚だけのことを考えていれば良いわけではありません。地域の生態系が抱えている課題はもちろん、コウノトリに対

する課題、維持管理、来訪者へのサービス、地域や農業上の課題、予算や工法上の配慮などを同時並行的に検討しなくてはなりません。その一方で、いくつもの課題を知恵と工夫で解決して行くのが、計画づくりの醍醐味でもあります。全国各地で、水辺生態系の復元が行われていますが、成功事例は決して多くないと聞きます。この理由は、知見がまだ十分に集積されていないことに尽きると思います。戸島湿地の計画においても、水位や地盤高を考えようにも、なかなか参考になる事例がなく、試行錯誤の末に決めたもので、ある意味では壮大なる野外実験なのです。この原稿では、戸島湿地の計画を検討する上での目的や考え方、配慮事項について簡単に解説したいと思います。

戸島湿地が目指すもの

まず、戸島湿地の最大の目的は、コウノトリの生息場所となる湿地を確保することです。これは、大切な田んぼを提供して頂いた戸島地域の人々からの希望でもあります。したがって、自然を再生することと同時に、コウノトリが定着し、生息場所として利用することが期待されています。コウノトリが採餌するためには、第一に開けた浅場が必要となります。湿地にした最初の1~2年は植生のない開けた浅場がありますが、やがてヨシやガマなどの植生で覆われてきます。開けた浅場は勝手に維持されるのではなく、定期的な刈り取り作業などの維持管理が不可欠なのです。しかし、ドロドロの湿地のなかを移動して、草刈りを行うことは極めて困難な作業になることが予測されます。この作業をなんとか軽減するために、あらかじめ湿地内での移動を容易にする足場となる作業道や排水を促す導水路が設置されています。これからが、「草」との戦いです。今後、広

大な湿地の植生を管理する頻度や努力量の把握、効率的な方法の確立が大きな課題となっています。ここで得た湿地管理のノウハウを全国に発信することも重要な役割となっています。

コウノトリが餌を採りやすい空間を創出したとしても、肝心の餌となる生物が豊富に生息しなくては生息場所として機能しません。生態系としての自立性を確立することも大きな目的です。給餌や放流によって餌を賄うのではなく、再生産の場を確保し、持続可能な生息場所を再生することを意味します。このため、円山川、楽々浦湾、周辺の農業用水路との連続性を確保し、外部から魚類が遡上できるように重点を置いています。もちろん、遡上する魚類は、コウノトリの餌資源でもあります。過剰な捕食から回避できるように、隠れ家を確保することで、持続可能性を担保できるよう配慮しています。

戸島湿地は、コウノトリだけがメリットを受けるものでなく、魚類や甲殻類、両生類、水生昆虫、植物などの生物にとっても再生産の場となるように、多様な生息場所の創出を行いました。湿地には、汽水湿地、淡水湿地、山際湿地の3タイプと、森林、小河川、水路が繋がりをもって配置され、多様な生物の生息場所を確保しています。なかでも、山際湿地については、当初から重要視していました。計画初期

の頃、湿地を設置する位置を選定する際に、「山と隣接した場所」と「円山川側の開けた場所」が選択肢となっており、どちらかを決断しなくてはなりません。このとき、私は山側を確保するよう豊岡市にお願いしました。これは、山地と隣接することで、山際や棚田跡地にできる湿地や小河川との繋がりが確保され、湧水による湿地全体への涵養や、湿地と森を往来する両生類等の生息場所を確保できるからです。

さらに、周辺においても、隣接する森林や草地、水田、楽々浦湾、円山川と実に多様な生息場所があります。このことが意味するのは、単にコウノトリにとって多様な餌がある、という事だけではありません。それぞれの生態系には、季節に応じた生物の出現ピーク、あるいは季節リズムがあります。つまり、季節に応じて、あるときは汽水の湿地で、あるときは山際湿地で、といった具合に、餌の豊富な時期と場所がずれることで一年中、餌にありつけるのです。もし、特定の生息場所で、限られた生物しかいない場所だと、ある季節にどっと生物が増えて、その後は一斉に餌がなくなる場合が想定されます。そうなると、どうでしょうか。鳥たちは、餌がない時期には飢えてしまうか、どこか遠くに飛び去るでしょう。中には、飢えをしのぐために、わずかに生き残った生物



すらも徹底的に食べ尽くしてしまうかもしれません。

このように、戸島湿地とその周辺に、様々な要素の生態系がコンパクトにつながって存在していることは、多様な生物を餌として利用できるコウノトリにとっても他の生物にとっても有益なことなのです。この他にも、森と湿地、湿地と川といったように複数の生息場所を発育段階に合わせて利用する生物にとっても、生態系の繋がりが生息の必須条件になる場合もあります。こうした生態系のつながりは、「エコロジカル・ネットワーク」と呼ばれ、国が定める「第三次生物多様性国家戦略」のなかでも重要事項とされており、これからの生態系管理や自然再生において重要な概念になります。戸島湿地では、これらを実践した形で、理念をランドワークとして実践している点で先進的だと言えます。

戸島湿地で再生する生態系のモデル

平成17年の当時、豊岡に滞在していた野生のコウノトリ「ハチゴロウ」は、台風23号による氾濫によってできたこの湿地で、盛んに餌を食べていました。豊岡には、他にもたくさんの水辺があるなか、なぜこの戸島に居着いていたのか。それは、川の氾濫によって、大量の魚が田んぼに迷い込み、水が引いて浅場となった戸島湿地に取り残されたからだと考えられます。他の湿地と違って、元々の地盤高が低く、水路を通じて楽々浦湾と繋がっていたことで、水が適度に交換し、湿地が乾燥することなく、魚類の新たな遡上が可能だったことも関係するでしょう。ハチゴロウの餌メニューには、ナマズなどの淡水魚だけでなく、ボラやサッパなどの汽水域に生息する魚もたくさん含まれていました。汽水域と隣接していたことが幸いし、多様な魚類が残されたのです。

このような現象は、偶然の産物なのでしょう。類似の状況が、自然界において他にないものかと思案したところ、ぴったりの生態系がありました。それは、河口干潟です。実は、これが戸島湿地を計画する上でのモデル生態系となっています。かつての河口部の広いヨシ原では、普段は小規模なワンドやタマリが点在し、川が増水すると水浸しとなり、植生

の根元に魚や水生動物たちが隠れ込みます。増水が引いても、その居心地がよければ、小魚はもちろんだ、大きな魚、淡水魚も海水魚も、小規模なタマリに取り残されます。最近では、小さなタマリが魚類生産を高める上で極めて重要な役割を果たしていることが分かってきて、取り残されるというよりも餌が豊富で好適だと考えられています。こうしたタマリでは、餌を採るのが下手くそなコウノトリも、まるで縁日のプールで金魚すくいをするかのように、なんとか餌にありつけるのではないかと、私は考えています。

増水だけでなく、毎日の潮の干満によっても同様の現象は引き起こされます。ただし、浅くて平らな場所が、川や海との繋がりをもって、広く残されていることが条件となります。しかし、河口近くの平らな場所の多くは、埋め立てによって改変されたり、堤防で仕切ることによって耕作地として利用されているのが現状です。この傾向は、全国的に、いや世界各地で起こっています。こうした危機感が、ラムサール条約の背景となっており、今もなお、河口部の干潟や湿地は、最も開発による消失が顕著な生態系でもあります。

今回の戸島湿地の創出は、単にコウノトリの生息場所というだけでなく、国内で最も失われた生態系、汽水域の干潟や湿地を取り戻す自然再生事業であると思います。しかも、自然を再生するだけでなく、コウノトリというスーパーアイドルを広告塔にして、湿地のもつ生態系サービスを国内外に発信する優れた自然博物館の機能を備えています。城崎の温泉街からふらっと戸島に立ち寄れば、湿地に隣接した管理施設からは、眼下でその様子をつぶさに観察できます。生物多様性を守ること、生物多様性を再生すること、生物多様性を学び伝えること、そして生物多様性が地域を活性化すること、これらが上手く連動するツールとして、湿地のワイズユースを実践することができれば、戸島湿地は世界が注目するモデルになるのではないのでしょうか。

ハチゴロウの戸島湿地 ここが見どころ、売りどころ！！

コウノトリ湿地ネット副代表 佐竹節夫

「豊岡市立ハチゴロウの戸島湿地」は、行政(兵庫県、豊岡市)による人工湿地です。コウノトリが餌場として活用することを目的に創られたものですので、あくまでコウノトリにこだわり、湿地に 1) 常時、コウノトリの餌となる生きものがあること、 2) この餌生物をコウノトリが捕まえやすい環境となっていること、が求められます。そのため、設計段階から様々な工夫が施されました。

このほどオープンしましたが、これから長い時間の中で、地域の自然力と人の手との共同作業によって良好な餌場となり、さらにその環境が持続可能となって初めて湿地が完成したと言えるでしょう。

当初段階で考えた様々な工夫が、果たして計算どおりに機能していくのか、管理を引き受けた協会としては正直、不安が一杯です。多くの方に来てもらい、アドバイスや指導をいただきながら勉強し、修正を繰り返していきたいと思っています。

本号では、工事完成直後の状況を紹介します。課題を考えてみたいと思います。

エコロジカルネットワーク(山～農業用水路～湿地～汽水水路～入り江～河川～海)が強くなりました

この湿地の最も大きな特徴は、水系が湿地を介して山と河川・海へ連続してつながっていることです。これまでも機能的にはつながっていましたが、水路は全て農業用であったため樋門が設けられ、農繁期は遮断されていました。そこで、通年魚類等が河川と湿地を行き来できるよう、汽水水路が新設されました。

この水路を遡上した魚たちは、汽水・淡水湿地で産卵し、汽水域で孵化した稚魚は河川に帰り、淡水域で孵化した稚魚は湿地の中で再生産を繰り返す。そうして円山川下流域全体の生物相を豊かにしていく大作戦です。

円山川の入り江(楽々浦湾)から見た既設水路

魚やエビ、カニは日本海や円山川本流から入り江へ、そしてこの水路で湿地に遡上します。もっと数が増える仕組みづくりが課題です。(写真)



新設された汽水水路(延長:140m)

護岸は自然石をコンクリートで積んでいますが、より生きものが利用できるよう3ヶ所に木柵が設置されています。(写真)





水路から湿地へ

魚たちが「入りたい!」と思ってくれるかな。(写真)



管理棟2階から見た湿地全景

中央に仕切り堤防が設けられ、奥が淡水域(約2.5ha)、手前が汽水域(約0.7ha)です。さあ、この湿地を生きもので一杯にしていこう。左山裾の人工巣塔では、コウノトリが3羽のヒナを育てています。(写真)



汽水域

日本海の潮位は1日に約0.5mの間で変動します。(夏期は水位が高く冬期は低い。今年4月は、

-0.06~0.63mでした) 汽水域は潮位と直結しているため、平地地盤は高潮位の際に冠水するようTP0.2m、深い所(澇筋)は常に湛水するようTP-0.4mで造成されました。したがって、潮位が0.2m以下であれば平地は地面が現れ、0.2m以上になると冠水します(例えば、潮位0.3mの際平地は水深0.1m)。

潮が引くときに逃げ遅れた浅瀬の魚をコウノトリが容易に捕まえるはず、という算段です。撮影時の潮位は約0.1m。(写真)



《実際には》

(1)魚は遡上しているか?

雨が降った4月14日以降、産卵期を迎えたコイやフナがたくさん遡上して来ました。あちこちで背中を出して泳ぎ回る様子は、ダイナミックな生きもの世界が現れたようで感動的でした。まずは成功。(写真)



(2)コウノトリの餌になっているか?

次の理由でなっていません。

1)産卵にやってくる魚はコウノトリが呑み込むに

は大き過ぎです。代わりにミサゴやトビが捕まえています。

2) 地盤が均平に造られているので魚は隠れ場がなく落ち着きません。採餌下手なコウノトリが捕まえる前に深みに逃げてしまいます。草よ、早く生えてくれ。(写真)



(そこで)

バイパス(水路)やワンドや池や網状をイメージして、スコップで少し平地を掘ってみました。ここに入ってきた魚が、潮位が下がったときに逃げ遅れて捕まるだろうと…。(写真)



(結果は?)

水路は群れで利用していますが、今のところ(4/27)、コウノトリの採餌は未確認です。もっとたくさん掘る必要がありそうです。

淡水域

水は約1.5km 上流の結川から農業用水路によって注がれます。

水の入り口、出口とも人間が管理するので、水深は一定に保つことができます。平地地盤は TP0.

25m(深い所(導水路)は TP-0.4m)で造成され、出口のゲートは TP0.4mで設定されているので、水深はコウノトリが採餌できる 15cm というわけです。

(魚の様子は?)

ここでも平地での魚の隠れ場がなく動きも速いので、コウノトリは容易に捕まえられません。餌はいるのに餌場にはなっていないのです。草の繁茂を期待すると共に、スコップ部隊が出てそこら中に窪地や水路をつくり、凸凹にする必要ありです。

写真は、汽水域から遡上してきたコイがわずかに生えてきた草(ウマノアシガタ)に産卵している様子です。(4月16日)(写真)



草にはたくさんの卵が付いていました。(4月18日)(写真)



4月13日には、魚の隠れ場となり産卵場所にもなるように真竹を括り、深み3ヶ所に沈めました。効果の確認はこれからです。(写真)



(課題)

淡水域の水は、ほとんどを占める農業用水とわずかな湧水、雨水とで賄われています。

農業用水は当然ながら農業優先。代かきが始まる4月末からは基本的には入ってきませんので、農繁期は農作業との細やかな調整が必要です。

湧水を豊かにするための里山整備も長期的な課題です。

起伏ゲート

山裾の湧水から日本海までを繋ぐ要となるのが、淡水域と汽水域の間にある起伏ゲートです。魚、エビ、カニなどが次から次に上らなければなりません。



ん。通常は淡水域の方が水位が高い(TP0.4m)ので水は汽水域へ流れるので、魚等が遡上できるような魚道にしてあります。

大潮等で汽水域の方が高くなる時には、フロートが浮力で自動的に機能してゲートを上げ、塩水が淡水域に入らないようになっています。実は、湿地整備の設計・工事において最も難しく難工事だったのがこのゲートです。常に汽水の水位が変動する中で、流水・遮断の機能と生きものの移動道を確保するという課題にアタックしています。(次ページ図1)

そのため、オープンから3週間の時点で既にいくつかの実施され、課題も見えています。今後も試行錯誤が続くでしょう。

《修正したこと》

1、フロートの浮力調整

フロートは、汽水域の水位が上昇すると TP0.35 mで浮力で上り出し、それ以下に下がればフロートも下がるよう設定されていますが、実際には淡水域からの水の重量と塩分を含んだ汽水の浮力との関係は単純ではありません。今後も微調整を要するかもしれません。

2、魚道板(隔壁)間隔の変更

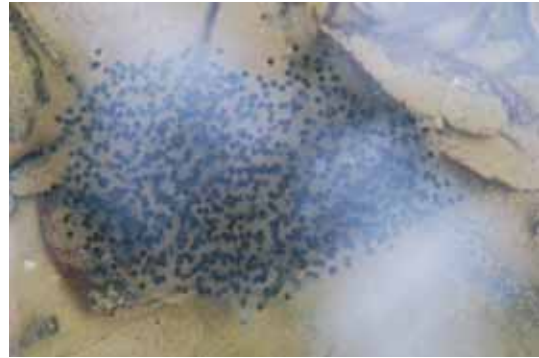
魚道は4段で各段の間隔は 30cm だったのですが、産卵に上ってくるコイは体長がそれ以上のものが多く、ストレートに上れないようでした。そこで、板2枚が撤去されました。(写真)

結果は、良好なようです。(4月 18 日、遡上するコイ)(写真)



(課題)

- 魚道は傾斜式隔壁をチドリX型配置が通常で、ここでも採用されています。しかし、延長3.6m、高低差0.7mで水量がたくさんある場合は、直線に流水する方が魚は上りやすい？ 要検討です。
- 板の隔壁が垂直に立てられているので、壁と流水の間に剥離が生じている 壁を傾斜させる？
- エビ、カニは木の板なら登れるが、ステンレス壁は滑って上れない 要対策



課題はすぐ出来そうなものから長期的な対策まで一杯だあ

農繁期の淡水確保、湧水出口の復旧、汽水水路での魚類、甲殻類の逃げ場づくり、里山の保水力向上などなど、湿地生態系を豊かにするためにやるべきことが次から次に出てきます。大変だけど面白い。

湿地が変化していく様子、取組みの失敗例や成功例など、今後、この紙面でありのまま報告していきます。

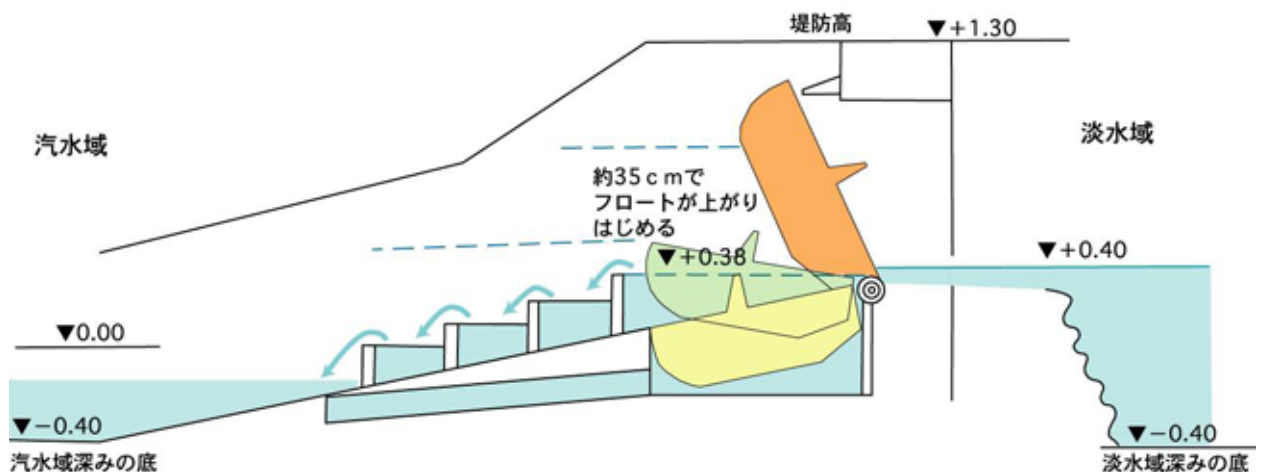
オープンするまでにアカガエルは喜んだ

管理道路は山際に作られています、少し位置をずらし、山裾に雨水が溜まるよう「山際湿地」が設けられました。3月9日にはヤマアカガエルの卵塊があちこちに。(写真)



起伏ゲート断面図

図1





先日、親鳥が死んだヒナを食べたという新聞記事(百合地巣塔、戸島巣塔で目撃される)を読み、少なからずショックを受けました。郷公園の関係者に質問してみると、親鳥には死んだヒナはモノなので、餌か邪魔物という認識しかないから食べたのだろう、という極めて冷静な答えが返ってきました。

私にはヒナを食べるなんて信じられず、親鳥が空腹に耐えかねて死んだヒナを食べてしまった。それ程まで餌が採りづらい状況に追い込まれているのではないかと、いくつかの疑問点がまた浮上した「事件」ではありました。

それでは、今年の繁殖について、中間報告をします。

1. 百合地巣塔の場合

現在、ヒナ1羽が成育中です。2007年は3個産卵1羽巣立ち、2008年は5個産卵2羽巣立ちであり、今年は6個産卵で1羽だけ生育となっています。3年間の生育/産卵率は28.5%と随分低い数字です。

ペアの特記事項としては、今年は夫婦げんかが目立ったそうです。げんかの原因は、どうやら餌捕りにあるようで、昨年まではこの子育て時期に河谷拠点の給餌はオスのみが採餌していたが、今年はメスも給餌を頼るようになったことでオスが激怒したとか。

なぜ、メスが給餌に頼るようになったのか？孵化が3月11日と早かったために餌生物がいなかったのか？疑問です。

2. 赤石巣塔の場合

昨年は福田の人工巣塔でヒナ1羽を子育てしました。



電柱の上の巣(野上センター)

去年、コウノトリの想定外の行動で不倫愛、略奪愛と話題になったペア達が、本年はすんなりと相手を変えることもなく繁殖行動をしました。しかし、今年はJ006を育てた福田巣塔を見向きもしないで最初から赤石巣塔にて着々と繁殖行動をしました。



赤石巣塔に巣材を運ぶメスの384

福田巣塔のある周辺田んぼは、この冬郷公園の給餌に依存せずにコツコツと採餌して過ごした個体が何羽かいて、餌不足はないはず。監視カメラ

を巣の中に設置したことを嫌がって赤石巣塔を利用したのでは、と思ったが監視カメラの影響はないというのが、郷公園の見解です。

とても残念なことに、赤石巣塔は4月上旬にもヒナ誕生の予定でしたが、いつまでも孵化の兆候現れず、21日に郷公園が4個を回収し調べた結果、無精卵とひび割れ卵だったとのことです。

3. 野上電柱の巣塔の場合

保護増殖センターの飼育ケージ上で巣作りを開始したが、飼育個体に影響が大きいため何度も撤去され、センター駐車場の電柱に場所を移して巣作りをした。またここも防疫上の理由などで巣材撤去され、最後にセンター手前の道路横の電柱に巣作りをした。

センターの外で、飼育個体にも影響の少ない電柱上だからという郷公園の判断で、関西電力さんのご協力により電柱上に巣台を設置し巣材を置きなおしてもらった。

巣塔真下の道路は一般のクルマも通過するがそれでも野上ペアは抱卵を続け、4月28日には3羽のヒナ誕生が確認された。

なぜ、近くの田んぼには人工巣塔があるのに、わざわざ道路横の電柱に営巣するのか？電柱が並ぶ様は林のように見え、電線が下界との結界のように感じられて落ち着くのではないかとの見方もあります。

4. 伊豆巣塔の場合

この巣塔も郷公園が監視カメラを設置。

昨年の孵化は5月中旬と遅かったが、1羽を巣立ちさせた。今年の繁殖行動の兆しは他の組とほぼ同時期だったが、なぜか伊豆巣塔には行かず、嶋地区にある高い送電線鉄塔の上に巣材を運び込んだ。停電や感電の恐れがあるため、関西電力により巣材を撤去された。しかし翌日にはまた立派な巣を造ってしまう、の繰り返しは何度かあり、最後には伊豆巣塔にて交尾行動。4月24日に4個産卵が確認されました。

5. 戸島巣塔の場合

今年も昨年と同様に3羽のヒナがすくすくと育っています。ハチゴロウの戸島湿地の整備工事がようやく終了し、汽水域と淡水域共に湛水されましたが、日が浅いので湿地生物の復活はまだ見られません。だから戸島ペアは湿地東側の山を越して、畑上や田結地区の休耕田などに餌を探りに行っています。餌不足を痛感した当会は、やむを得ず今年も戸島ペアに給餌をして支援をしています。

6. 野生個体・エヒメの場合

野生個体のエヒメ()が放鳥個体と交尾、郷公園飼育ケージ上で営巣し産卵が始まりました。ところが、経験不足からか、オスが卵を捨ててしまったり、巣を留守にするためその都度カラスに食べられるという事態となりました。その繰り返しで、エヒメは10個も産卵したのです。

コウノトリ保護増殖事業・研究をしているその場所で野生個体がわざわざ飛来して、しかもペアになって繁殖行動をし10個も産卵したというのに、繁殖に至らなかった。

卵を放棄するならそれを防ぐ手立てはできなかったのか？カラス撃退法は編み出せないのか？そもそも10個も生んで母体は大丈夫なのか？大きな疑問が残りました。

今シーズンはコウノトリの不幸が続き、人里での共生は予測出来ない災難が発生するかもしれないと思われ知らされました。

人とコウノトリが共生しながら進める豊岡の野生復帰は、野外で生まれ巣立った個体が、何世代にもわたって新しい命を育み続けてくれることだと私たちは考えています。試験放鳥の段階から、もっと先へ進み、「コウノトリとの約束」が果たせるまで、市民は何ができるのか、何をしなければいけないのかをしっかりと考え続け、行動していきたいと思えます。



投稿のページ(たくさんの人に支えられています)

子供たちは未来をになう!

豊岡市立城崎小学校 谷垣 茂彦

「すげえ、ほんまに飛んどる! めっちゃいっぱいおるで!! あれっ、全部サギやんか……。」

6年生の子どもたちとコウノリとの出会いは、2年前にさかのぼります。戸島湿地が整備されるということで、在来の生きものたちを一度捕獲し、別の場所に移す「救出大作戦」を行いました。もともと生きものが好きな子が多かったこともあり、その興味はやがてコウノリ学習へ……。まずは、コウノリについて「知る」ことから始めました。大きさ、エサの種類、特性、絶滅した理由、そして放鳥までのあゆみ。深く知れば知るほど、子どもたちはコウノリを好きに、また身近に感じるようになりました。

城崎の街は、古くからコウノリとつながりがあります。「鴻の湯」はコウノリが足の傷を癒していたことからその名が付けられました。また街の玄関口、城崎温泉駅前にはコウノリの像が立っています。ここで、子どもたちは疑問に思います。「そんな城崎なのに、なぜコウノリが飛んでいないのか。」そこで今度は、城崎がコウノリにとって過ごしやすい環境かどうかを「考える」ことにしました。題して「コウノリは『城崎』のココが好き」。

子どもたちなりに予想を立て、「エサが豊富にある」「木がたくさんあり、きれいな場所が多く自然が豊か」「田んぼや川が広く、子育てに向いている」「静かにしようとする町の人たちがたくさんいる」といった意見がだされ、それを確かめるために「調べる」活動に取り組みました。

どれくらい大きな音を立てるとコウノリは嫌がるか、人間がどれくらい近付くと警戒するのかを調べるために、実際に大声を出したり、コウノリとの距離を測ったりして独自の調査を行いました。その結果、子供たちとは120cm以上必要だが、給餌をしている湿地ネットの皆さんには、5メートルくらいまで近づいてくるこ

とがわかり、警戒心が強い反面、安全が確かめられると人懐こい面もあるということ学びました。また、エサとなる生き物が豊富で、自然豊かな戸島湿地ですが、巣作りをするための松の木が山には1本も生えていなかったり、円山川の岸辺や楽々浦湾には、上流から大量のゴミが流れ着いていたりして、コウノリが安心して暮らせるためにはまだまだ課題が多いこともわかりました。

昨年の10月には本校から3名の子どもたちが、韓国で開催された「KODOMO ラムサール」に参加しました。現地の小学生に戸島湿地の良さと自分たちの取り組みを紹介しました。また韓国の3大湿地と呼ばれる「ウポ沼」「チョナム貯水池」「ナクトンガン」を見学し、その広さと生きもの多さに驚かされました。そして、そうした環境を守るために人々が努力していること、生きものには生きもの世界があり、両者が共に生きていくことが大切なんだという価値観を学んだように思います。

私はクラスの子どもたちに話しました。「私たちに十分なお金もない、道具もない、権力もない。だけど、何とかしたいという強い思いはある。それを持っていれば、同じ願いを持った人々が集まってくれる。やがてそれは人と人との『つながり』をつくり、大きな力となる。だから、いまみんなにできることから始めよう。」

子どもたちは「私たちが思いえがく城崎の未来予想図」として、自然がいっぱいでゴミがなく、コウノリが空を自由に羽ばたいている城崎の街を目指そうと掲げました。コウノリのために、そして私たち自身のために、今日からできることを始めませんか。私たちは未来を担う責任者なのでから。

皆様 山、川を見つめようではありませんか。

楽々浦地区 瀬崎権太夫

昭和の30～40年代の建築ブームの波にのり、山林が自然林から人工林へと大きく様変わり致しました。

今一度、見直し、検討してはどうでしょうか。もっと厄介ものは、百害あって一益なしの竹林の猛威でございます。昨年、一昨年と各方面から数多くの皆様方のご支援で、戸島湿地人工築塔周辺のみ、竹を伐採なされたことは見聞きいたしておりますが、個人の力量には限界も御座いましょうから、各方面の皆様方のご協力を賜り、継続的に整備をなされたら如何かと思います。

ついでには山裾の景観もよくなり、将来が楽しみですよ。



その後で、広葉樹を植樹し、災害時にも耐えられる足腰の強い自然で豊かな森を再生させ、プランクトンの発生を促す微生物を含んだ水を山から水路、楽々浦湾から円山川、日本海へと注ぐことが魚介類の生息に繋がるのではないのでしょうか。

このような繰り返しによって、戸島湿地に魚の遡上を容易にさせることにより、コウノトリたちに声援を送り私たちがコウノトリから地域に元気を貰おうではありませんか。

末筆ながら遠く離れた旧九州石油さんの皆様方と一緒にボランティア作業をさせて頂きましたことは、今となっては懐かしい思い出です。





宮垣芳和

ハチゴロウありがとう

平成 17 年のコウノトリの試験放鳥でコウノトリ 5 羽が自然放鳥され、5 羽とも大空高く舞い上がったときの観客の皆さんの大歓声が今も鮮明に私の中に焼きついています。

飼育コウノトリ 5 羽を見事天高く舞い上がらせたのは、平成 14 年 8 月 5 日にこの豊岡に飛来した野生コウノトリのハチゴロウの行動記録の成果だと思えます。

現在 30 羽近いコウノトリがあちこち飛び回って各地に明るい話題を提供しているのも、ハチゴロウの影響が大きかったと考えられます。

そのハチゴロウは、平成 20 年 2 月 26 日、ねぐらのコウノトリ保護増殖センターのアカツの木からわずか 800 メートルくらい離れた金剛寺地区山際の竹やぶのなかで発見された。

一緒にコウノトリを追いかけていた倉敷の林さんと現場に行き、花を供えてハチゴロウの死を悲しんだ。

ハチゴロウはこよなく愛したこの豊岡で亡くなり、さぞかし満足していることだろう。

ハチゴロウの功績により名づけられたハチゴロウの戸島湿地が 4 月 2 日、オープンしました。今後湿地には、たくさんのコウノトリや野鳥が来て、にぎわうことでしょう。

私もハチゴロウから勇気を貰ったので、コウノトリも住める豊かな環境づくりのため、仲間の人たちと一緒に元気で活動していきたいと思っています。

ハチゴロウ、本当にありがとう。



田岡 茂

ハチゴロウの戸島湿地『夢』

4 月 2 日、ハチゴロウの戸島湿地がオープンした。城崎に新しい名所?の誕生だ。

4 月 14 日 JTB 加盟店旅館の兵庫支部総会が行われた。総会終了後に中貝豊岡市長の講演があった。30 分間の講演は『コウノトリが豊岡の地から姿を消して、今再び自然界にコウノトリが飛んでいる』コウノトリ市長の大得意とする講演だった。

1960 年撮影のコウノトリと但馬牛が川原にいる有名な写真を取り上げ、1971 年、野生コウノトリが絶滅。コウノトリ野生復帰が目指すもの、その取り組みが人々の生活環境を再考させ、環境経済を豊岡市がしっかり取り組んでいるという内容だった。すばらしい講演に皆が聞き入り賞賛した。

この豊岡市の取り組みを日本中の人に知らせたいと私は常日頃思っている。新聞や TV でニュースが流れる。又昨年東京で JR 山手線の電車の中で、豊岡のコウノトリが巣立ちをした TV を見た。電車の乗降口の上の案内 TV だが、いろんなニュースも流している。大勢の人に豊岡のコウノトリの取り組みを見ていただきたいが、まだまだ足りない。そこで私の提案だが……コウノトリ市長が今まで取り組んできた『コウノトリも住める豊かな環境づくり』を物語にして、中学校の教科書に載せて子供への自然環境教育の一環として欲しい。これなら、将来日本人全員が『豊岡市城崎温泉とコウノトリを知ることになる。』なんといい提案ではないでしょうか？

頑張れ市長、教科書に載るその日まで！



水に映るコウノトリと観光バス



コウノトリ湿地ネット賛助会員名簿

法人会員

株式会社北星社

個人会員

福井県 香川正行 広島県 井上基 香川正行 神信浩一 木村雄二 佐藤裕幸
中野裕次

兵庫県 神戸市 谷口進一 養父市 谷廣美

豊岡市 植村久樹 大澤幸雄 大谷賢司 尾畑富久雄 岸田政則 四角美也子

瀬戸義泰 谷垣知子 中尾光夫 藤野秀子 細田百合子 堀田和則 若森洋崇

(2009年2月20日～4月15日)

ありがとうございました。これからもよろしく願いいたします。



おもうこと (湿地ネット代表横田登代子)

山が萌黄色に染まってきました。コウノトリのヒナもスクスク育っています。

ハチゴロウの戸島湿地では、カワセミの夫婦が毎日訪れ、目の前で小魚をダイビングキャッチしてくれるので、カワセミファンを喜ばしています。

湿地づくりはコウノトリのためと思ってがんばってやっていますが、カワセミをはじめいろいろな動植物がやってきてくれます。自然は人間たちの気持よりもっと寛大で、自然を取り戻そうと少しだけ考え行動すると、すぐ自然は答えてくれるように思います。

考え行動できる組織づくりにご協力をお願いいたします。

「編集後記」

昨年からジム通いを始めました。体力作りに、ちょっぴりスマートになることも期待して……。1年ほど経った現在、体力は少しいたようですが、体形のほうはそれほど変化がないようで。でも、この成果を、湿地作りに役立てて、ぜひ元を取ろうと考えています。(宮村)

「50の挑戦」と、志を胸に戸島湿地管理棟勤めを、カッコよくスタートしたつもりが……。足元は泥だらけ、雨に打たれ、風に吹かれ、掃除に、あれやこれやの毎日から……。ヒナが生まれ、来館される方々がフィールドスコープを覗かれ、「わあー！見えた」「大きいなっとなるあー」と なんとも無邪気な第一声。年配の方のまなざしはあたたかく、子供たちの瞳は輝いている。

私も、「初心」に戻ってファイト！ファイト！（森）